

―特集―

匠の技で支える郷土の誇り

町内には、さまざまな文化財が残されており、そこには、かつて半原の地で栄えた「糸の町愛川」を支えた匠の技が刻まれています。

江戸時代から昭和にかけて活躍した半原宮大工。今、その名を絶やすことなく、次の世代へつなごうとする方たちがいます。

問郷土資料館 ☎046(280)1050



半原宮大工矢内匠家14代の曾孫弟子
鈴木光雄さん



半原宮大工の作業風景（明治末期）

江戸城にも携わった半原宮大工

「半原宮大工は、約200年間にわたって技術を受け継いできました。その歴史を伝えたいと思い活動してきました」と語るのは、半原宮大工矢内匠家14代の曾孫弟子に当たる鈴木光雄さん。鈴木さんは、自身も大工として建設業を営むとともに、半原宮大工の歴史や技術について20年にわたり調査を続け、後世へ伝える活動を行っています。

半原宮大工の始まりは江戸時代後期。当時の半原村は農業だけでの生活は難しく、養蚕や木挽、大工などの仕事で暮らしを支えていました。その中で12代目の柳川右兵衛安則は、江戸の幕府御用大工に弟子入りし、高度な工匠技術を身に付けました。その後、小田原藩大久保家のお抱え大工となり、腕を認められて江戸城の作事にも携わるようになります。

「安則さんの特徴は、建築技術だけでなく彫刻にも優れていたことです。神輿や屋台などの彫刻まで手掛けることで、半原宮大工の仕事の幅を広げました」

その技術を学ぼうと多くの大工が弟子入りし、半原宮大工は次第に大きな集団へ成長。14代目の矢内但馬藤原高光の時代には、幕府から苗字帯刀を許され、江戸城の修復をはじめ、関東一円の神社や寺院の建立にも携わるまでになりました。

「糸の町」を回した宮大工の技

明治から昭和初期にかけて半原で撚糸業が盛んになると、宮大工の技術は、水車を動力とする撚糸機械の製造や改良にも生かされました。社寺建築だけでなく、地域の産業発展にも貢献したのです。

「半原宮大工って、やっぱり相当な技術があったんだなと、調べれば調べるほど分かってきました。だからこそ、皆さんに知ってほしいと思っています」



水車を動力とした八丁式撚糸機
（町指定文化財）



「すごい」を地域の誇りに変える



（一社）半原宮大工集団
本村克裕代表理事

半原宮大工は、高い技術を持つ大工集団として知られていました。しかし、その存在は次第に忘れられていきました。

こうした中、令和5年に設立された（一社）半原宮大工集団。代表理事の本村克裕さんは、半原に事業所を構えたことをきっかけに、その歴史や価値を知りました。

「外から見たら、半原宮大工という歴史はすごく価値のあるものだと思います。手掛けた神社や寺院、神輿は県内各地に残り、今も大切にされています」。寒川神社や国の登録有形文化財に登録される見込みの宇都母知神社（藤沢市）などの建築、浜降祭（茅ヶ崎市）で使われる神輿にも、その技術が受け継がれています。「地域を支え、人や場所をつないできた半原宮大工を盛り上げることが、地域の誇りにもつながると思っています」

さまざまな取り組みから歴史的価値を発信

半原宮大工集団は、宮大工の技術だけでなく、外国人観光客向けの和文化ツアーや宮大工体験など、地域の神社や寺院、祭礼の価値を発信する活動にも取り組んでいます。

「外から認められることで、初めてその価値に気付くこともある。外国の方が『すごい』と言ってくれることで、地域の人にも改めて半原宮大工の価値を知ってもらいたい」



宮大工体験



若き宮大工の育成

地域を支える役割を担う存在

かつての半原宮大工は、社寺だけでなく住宅や学校、公共工事など地域のさまざまな仕事を手掛けていました。

「昔の半原宮大工は、人や仕事をつなぎながら地域を支える『ゼネコン』のような存在だった。現代版の矢内さんみたいなことを、僕たち半原宮大工集団がやっているんだと思います」

宮大工の技・心を次の世代へつなぐ

宮大工の担い手が減少する中、本村さんは、宮大工養成塾神奈川校の講師として、宮大工の技術継承にも取り組んでいます。塾生は、技術だけでなく、職人としての心構えや、木と向き合う姿勢も学びます。

「今は一人の職人が技を極めるだけでなく、宮大工という仕事そのものを次世代につなぐ仕組みづくりにも力を注いでいます。鈴木さんの思いを受け継ぎ、僕たちは現代の方法で魅力を発信し、若い世代へ技術をつないでいます」

技術と誇りを、次の世代へ。半原宮大工集団の挑戦は、伝統を守るだけでなく、半原宮大工を地域の誇りとして、未来へつないでいく取り組みへと広がっています。



写真提供：（一社）半原宮大工集団

受け継がれる技と心を感じる

文化財として残る半原宮大工が手掛けた建造物

町内に残る文化財の中には、半原宮大工が手掛けた建造物が数多くあります。卓越した技術と、建物に向き合う職人たちの誇りと情熱が、今もなお私たちのまちの風景を支えています。

勝楽寺の山門

町指定文化財　所田代2061



勝楽寺の山門は、文政13(1830)年の着工後、半原宮大工の矢内匠家が親子二代にわたって造営に携わりました。

2階建ての壮大な木造建築を、わずか12本の柱で支え、くぎなどの金物を一切使わず、木材を複雑に組み合わせて建物全体を構成しています。さらに、雨から建物を守るために大きく張り出した屋根も、長い年月に耐えられるよう、精密に組み上げられています(写真左下)。

大規模な木造建築を支える高度な構造技術と、長い年月に耐える確かな技、そして迫力のある彫刻(写真右下)。約200年前に造られ、今もその姿を残す勝楽寺の山門は、半原宮大工の技術の「最高峰」ともいえる建造物です。

龍福寺の山門

町指定文化財　所中津408





安永7(1778)年に半原宮大工の手によって建てられたと伝わっています。

山門は、2階建ての重厚な造りで、屋根の正面には美しい曲線を描く装飾が施されています。建材にはケヤキが使われ、鳳凰などの精巧な彫刻が随所に施されています(写真下)。脚部は竜宮城を思わせる白壁造りの珍しい姿で、龍福寺の山号「海蔵山」と寺名にちなみ、「海」や「龍」をイメージしたものではないかと考えられています。

日本の伝統的な建築様式に、中国から伝わった様式を取り入れた、巧みな造りが特徴です。

古民家山十邸の主屋と門

国登録有形文化財　所中津485-1









明治16(1883)年に建てられた山十邸には、半原宮大工・矢内匠家の高い技術が随所に生かされています。

特に目を引くのが、正面に構える「薬医門」です。農家の門としては珍しいほどに大きく、屋根を支える木組みや細かな装飾など、宮大工ならではの技術を見ることができます。

主屋にも、ケヤキの大黒柱(写真左下)や7メートルを超える一枚板の上がり段(写真右下)など、良質な木材を生かした豪壮な造りが残されており、その一つ一つに半原宮大工の技術が息づいています。

文化財にふれて愛川町を知る

◀町の文化財はコチラから

探してみよう
文化財案内板・標柱

町内には、歴史・考古資料、建造物、民俗文化財、史跡、名勝、天然記念物など、国や県・町に指定・登録されているものを含め、さまざまな文化財があります。

それぞれの文化財にまつわる伝説や民話、歴史などを紹介するため、町内の各所に文化財案内板と標柱を設置してあります。



町HP

そもそも文化財って??

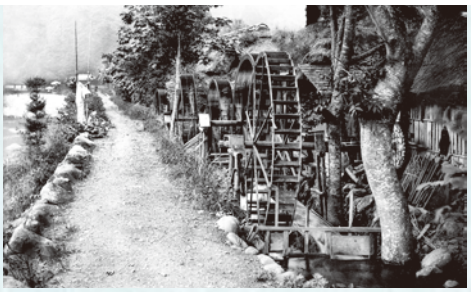
文化財とは、地域の歴史や文化、昔の人々の暮らしなどの大切な財産を未来へ残していくため、国・県・町が指定・登録しているものです。町内にも、三増合戦場跡や三増の獅子舞、平山橋など、さまざまな文化財が残されています。



三増の獅子舞
(県指定無形民俗文化財)

中津川とともに発展した愛川の文化

本町には、中津川とともに発展してきた歴史があり、地域の暮らしや産業を伝える文化財が残されています。特に半原地区の撚糸業では、川の水を利用した撚糸機や、作業のときに歌われた民謡「管巻き唄」などが残されています。これらの文化財は、地域の歴史や人々の営みを今に伝える大切な財産です。



半原地区の撚糸業は中津川の流れを利用した水車を動力として栄えた

文化財を知ると、この町がもっと面白くなる　町文化財保護委員会議 大矢善久委員長

文化財には、愛川の人々が歩んできた歴史や暮らしの知恵が詰まっています。撚糸業や半原宮大工など、「愛川ってすごい！」と思えるものがたくさんあります。文化財を訪ねてみると、いつもの町並みも違って見えてくるはずです。ぜひ実際に足を運び、愛川の歴史と魅力を感じてみてください。また、ご家庭に古い写真や民具、古文書などがありましたら、お気軽にご相談ください。



来て、見て、楽しんで
町の歴史や文化を紹介

愛川町郷土資料館

県立あいかわ公園内

「ふるさと愛川」のリアルを体験！



昔の道具や資料など、実物だからこそ伝わる人々の暮らしや知恵、技術に出合えます。企画展や歴史講座も開催しています。

入館者100万人達成！

入館記念式典を開催しました



平成21年4月23日の開館から17年を経た8月22日に入館者100万人を達成しました。

当日は、記念すべき100万人目の入館者となった西澤さんご家族(埼玉県八潮市)へ、茅町長からお祝いの挨拶に続いて、記念の花束、「あいちゃん」のグッズ、愛川ブランド「愛ちゃん米」を記念品としてお贈りしました。